

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アンデスの民俗芸能の現在〈基幹研究：ペルーの文化資料に関するデジタルアーカイブズの構築と活用〉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2024-04-04 キーワード: 作成者: 八木, 百合子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000117

アンデスの民俗芸能の現在

八木 百合子

本プロジェクトは、民博が所蔵するペルーの文化資料のうち、アンデスの民俗芸能に関わる資料に特化したアーカイブズを構築することを目的としている。対象となるのは、アンデス地域の宗教行事に登場するコンパルサ (comparsa) と呼ばれる仮装行列および民俗舞踊 (danza folklórica) に関する標本資料で、仮面、衣装、楽器等が含まれる。構築したアーカイブズを使って、民俗芸能の担い手たちと協力しながら、現在みられる芸能の拡がりについて情報を深化させていくことが最終的な目標である。以下では、アーカイブズの見取り図を示しながら、今後の活用の方途について考えてみたい。

「アンデスの祭りとコンパルサ」に関するアーカイブズの構築

アンデス地域には、それぞれの村や地域に暮らす人びとの歴史や世界観を表現した多様なコンパルサと民俗舞踊がある。インカ時代の戦士の格好をしたカチャンパ、植民地時代にアンデス高地の鉱山に連れて来られた黒人奴隷の姿を表したモレナーダ、リヤマなどの家畜を連れて村々を巡るコリヤ地方の行商人カバック・コリヤ、温暖なマヘス谷で採れた果物や蒸留酒を売り歩く商人を風刺したマヘーニョなどは、クスコやアルティプラノ地域 (ポリビアと国境を接するプーノ県

を中心とするアンデス高原高地) のコンパルサの代表格である。こうしたコンパルサや民俗舞踊は、固有の仮面や衣装を伴い、カトリックの祭り (聖人や聖母の祭礼、カーニバル) や巡礼などの宗教行事の際に登場する。

民博には、ペルー南部高地のコンパルサの仮面や舞踊の衣装のまとまったコレクションがある。そのなかにはアンデスの民俗芸能として有名なハサミ踊り (アヤクチョ県) や悪魔の踊り (プーノ県) に関する仮面や衣装のほか、クスコ県のパウカルタンボ村の聖母祭礼に登場するコンパルサの仮面が多数含まれる。本プロジェクトでは、コンパルサや舞踊の種類、それらがみられる祭りごとに資料を関連付けたアーカイブズの構築を目指している。また、民俗芸能の実演の際には、踊りやコンパルサのステップに合わせた音楽を伴うことから、関連する楽器の情報を紐づけるとともに、実際の上演の様子や踊りの特徴がわかるように、コンパルサや舞踊の映像資料も掲載する予定である。これにより、アンデスの民俗芸能を立体的に描き出すのが本プロジェクトのねらいである。

民俗芸能の担い手とのネットワーク形成

仮面をはじめ、コンパルサや民俗舞踊で用いられる装具の多くは、地元の職人たちの手によって作られてきた。ペルーを代表する民衆芸術家のホアキン・ロベス (アヤクチョ県)、



振り回すと音の出る楽器マトラカを使って奴隷の足枷を表現するモレナーダ (2023年9月、ペルー・クスコ市、筆者撮影)



シンボルの酒瓶をもって踊るマヘーニョ (2007年6月、ペルー・クスコ市、筆者撮影)



アンデス高地に棲息するビクーニャやアルパカの毛皮を携えたカバック・コリャ（2016年9月、ペルー・クスコ市、筆者撮影）

サンティアゴ・ロハス（クスコ県）、エドウィン・ロサ（プーノ県）などの名匠たちはアンデス南部地域特有の仮面制作を手掛けてきたことで知られる。既に終了した第3期のフォーラム型プロジェクト（中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築：2018-2022）では、アンデスの民衆芸術に携わる職人、すなわちモノの作り手たちに着目した調査研究を行ってきた。とくに、ペルーを代表する職人の工房（家系）の変遷や世代ごとの作風の違いから、モノ作りが現代に至るまでどのように受け継がれてきたのかを明らかにしてきた（ラテンアメリカ地域文化資料データベース⁶）。

これに対して、第4期の新たなプロジェクトでは、モノの使い手となる民俗芸能の担い手たちとのネットワーク形成に重点を置いている。ここで対象となる担い手たちの大半は、クスコ県をはじめとするペルー南部高地の宗教行事に参加する人たちである。アンデスの宗教行事の際にみられるコンバルサや民俗舞踊は、神や聖人に対する奉納の一種であり、担い手たちの多くは宗教的な信仰を基盤に集う人たちである。たとえば、筆者が長年調査を行ってきたクスコ市のアルムデナ教会の聖母祭礼に参加するコンバルサの男性メンバーは自身の経験を次のように述べていた。

「我々は聖母を崇敬するために9月の聖母の祭典の日には必ず集まる。聖母の誕生を祝ってここで歌を捧げ踊るのだよ。我々のグループが出来てから15年くらいがたつ。常に15～20人程度の踊り手がいる。私の子供もみんな小さい頃からこの踊りを覚えて一緒に祭りに参加してきた。」

このように、コンバルサの参加は宗教的な信仰を基盤にしつつ、その伝統は世代を越えて受け継がれていくものでもある。本プロジェクトでは、こうした担い手たちに関する調査を通じて、民俗芸能の継承の問題について考えていくことも視野にいれている。

民俗芸能の分布状況の把握

近年、コンバルサや民俗舞踊は農村部だけでなく、都市部

八木 百合子（やぎ ゆりこ）

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。専門は文化人類学、ラテンアメリカ地域研究、とくにアンデス民族学。著書に『アンデスの聖人信仰一人の移動が織りなす文化のダイナミズム』（臨川書店2015年）、論文に「聖母の奉納品にみるアンデス的意匠—クスコのアルムデナ教会の事例から」『古代アメリカの比較文明論』（京都大学学術出版会2019年）などがある。

でも大きな拡がりを見せている。アンデス山岳地帯のクスコ市では、市内各所の教会で催される祭礼に参加するコンバルサのグループが年々増加傾向にある。上述のアルムデナ教会の聖母祭礼も1990年代末頃からコンバルサの数が急増しており、現在30近いグループが参加している。

こうしたアンデスの民俗芸能の拡がりには、ペルーで1980年代以降にとりわけ顕著となった農村から都市への人の移動の問題と関わる。農村部では、1960年代から農地改革の影響により住民の多くが都市へと流出していくが、この人の流れにさらに拍車をかけたのが、1980年代半ばに農村部を中心に激化した反政府武装勢力によるテロ活動である。この時代、テロの被害から逃れるために農村から多くの人が都市へと移り住んでいった。農村出身者たちが都市で新たなコミュニティを形成していくなかで、同郷者たちが集い、出身地にゆかりのあるコンバルサや民俗舞踊を都市の祭りで上演し始めることも少なくない。一方、そうした地縁や血縁だけでなく、都市で形成されたさまざまなつながりをもとに、その規模を拡大しているグループも存在する。また、なかには個人的な信仰から特定のコンバルサのメンバーになる人や舞踊や衣装の美しさに魅了され踊り手となる人もいる。コンバルサのグループの規模は個々に異なるが、数十人を擁することがほとんどである。各グループが独自の規範をもち、正規のメンバーとして認定されるには、下積み期間を経る場合もある。本プロジェクトでは、現地の研究機関や担い手たちの協力のもと、クスコ市とその周辺の農村地域にみられる民俗芸能の調査を実施し、現在の分布と拡大状況の把握を試みる。コンバルサや舞踊の変化を追究するだけでなく、個々のグループの成り立ちや構成員の特徴を捉えることで、民俗芸能と地域コミュニティ形成のあり方について考えていくことも本プロジェクトの課題の一つである。

以上を通じて、クスコを中心とするペルー南部高地の民俗芸能の記録と今後の研究に向けたプラットフォームづくりをすすめる。ペルーでは今世紀に入り、各地で伝承されてきた民俗舞踊やコンバルサを国の無形遺産として指定する動きが加速している。現在みられる民俗芸能の実態を把握し、それらを記録する本アーカイブズは、この点においても重要な意義をもつものであり、人類の文化遺産の保存や活用に向けた貢献や研究展開が期待される。